

第35歩

シビックプライド

年度の変わり目となる3月、4月は、出会いと別れが交錯する季節です。進学や就職、転勤などにより、新しい環境での生活が始まる方も多いと思います。

もう44年も前になりますが、私自身、大学進学の前年の3月から4月にかけて、受験と合格発表、そして入学と、何度か香川と東京を往復しました。そのたびに故郷と大都会との違いに戸惑いながら、期待と不安、喜びと哀しみなど、相反する様々な感情が交錯していたように思います。特に、今でも思い出すのは、高松港から連絡船で四国を離れるときの淋しさと気分の高揚が複雑に入り混じった感情です。瀬戸大橋開通のちょうど10年前でした。このときの感情が、私の「郷土愛」というものの源泉に近いものであるように思います。もちろん、連絡船のデッキで争うようにして並んで食べたうどんの味も含めての感情です。

「郷土愛」に似た概念を持つ「シビックプライド」という言葉があります。都市に対する市民の誇り、という意味で使われることが多い言葉ですが、単に地域に対する愛着を示すだけでなく、権利と義務を持って活動する主体としての市民性という意味も含まれているようです。

2月中旬、このシビックプライドの醸成に関して、教育フォーラムが開催されました。テーマは「高松で育ち、高松で学び、郷土への愛着と誇りを醸成するために」というものです。高松市出身で高専を卒業後に渡米し、教育関連事業を幅広く展開されている「ライトハウス」代表の込山洋一さんの特別公演とメンバーを加えてのパネルディスカッションがあり、シビックプライドに関して、様々な観点から掘り下げた鋭い指摘がなされました。特に、「人の香川、人の高松」と呼べるような地域とすること、そのためには「多様性と寛容さ」が大事であり、「利他の心を持つ人の集合体」にしていくことが肝要、との込山さんのご意見は、まさに我が意を得たりでした。

「寛容でない場所は決して発展しえない」（「クリエイティブ都市論」リチャード・フロリダ）し、シビックプライドも育たない、ということでしょう。市民一人一人が「夢と誇り」を持つことができ、それを大切にできる都市でありたいと思います。

